



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	コロナの時代：中国大陸の南北を越える周遊的な隔離生活
Author(s)	田，思源
Citation	Sauvage：北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院院生論集，17，28-32
Issue Date	2021-03-29
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/83064
Type	other
File Information	Sauvage17_2_3r.pdf



コロナの時代：中国大陸の南北を越える周遊的な隔離生活

田 思源

立教大学大学院観光学研究科 博士前期課程

1. はじめに

筆者は2017年10月、山形大学文学部の研究生として中国から来日した。2018年4月から立教大学に転学し、立教大学で1年間の科目履修生を経て、2019年4月に博士前期課程に進学した。修士論文は「中ロ国境地域における国境都市の地域特徴および国境観光の現状―黒河市を中心として―」というタイトルで調査・執筆中である。2020年の初頭から世界的に感染が拡大していた COVID-19 がいまだに深刻化の一途を辿っていることを背景に、筆者は 2020 年度に実施を予定していた中ロ国境地域の長期現地調査計画の実施が不可能であると判断した。この調査は、2020 年度に修士論文を執筆し修了するうえで必須なものであったゆえに、不本意ながら、修士論文の提出を一年間延長する決断を下さざるを得なかった。

本稿は、大学入学・修士課程修了とともに同世代の仲間が遅れをとるなど停滞期が多い筆者による、新型コロナウイルス禍の経験、および中国帰国後の隔離生活の記録である。感染症の影響でフィールド系の調査・研究活動に足踏みを迫られている院生の同士たちが、今後現地調査の実施の困難を克服してゆくにあたって、本稿がその一助になれば嬉しいと思う。

2. コロナの蔓延から帰国調査まで

2020年1月下旬、日本国内の感染者数はまだごくわずかであり、国内での感染拡大の前に筆者は埼玉県から東京都内に引っ越していた。引っ越しをきっかけに、家に WIFI を整備した。それ以前は自宅に WIFI の整備がなく、インターネットに頼らない生活をしていたのであった。人と対面で会話したり、移動したり、居酒屋でお酒を飲んだりすることが好きで、インターネットは最低限の利用で十分だったのだ。論文やレポート作成の一切は大学院の研究室で取り組むため、パソコンを家に持ち帰ることもない。だが COVID-19 の本格的な襲来以降、生活の仕方は激しく変わり、家から出ず、zoom による他者との連絡が主流となっている。今振り返ると、引っ越し直後に WIFI を整備できたことは非常に幸運であった。

2月においてもなお、コロナは春風と共に消えてしまうのだろうと筆者は思っており、現地調査に支障がでることは予測もしていなかった。感染症の影響で生活や研究が満足に進められないストレスで、つねにイライラしているような気分で迎えた8月には、入国制限政策が世界的な範囲で採られてきたため、いっそう不自由となった。さらに深刻なことに、筆者の研究対象地である中国・黒河市は、ロシアに繋がる税関（中国語は口岸）を完全に閉鎖し、国境の物理的閉鎖性が破格的に高まった。黒河市は、観光客のいない国境観光都市になってしまったのである。そのため、COVID-19 以前に収集してきた中ロ国境観光についてのデータの一部は、すでに適用できないものとなってしまった。

代わりに、COVID-19 の時代が新たにもたらした問いもある。現在の中ロの陸上を結ぶ国境は、国境紛争の時代以降、不可抗力で新たな現象を生みつつけており、今日においてのそれはまさにコロナ的な国境地域と呼びうるのではないか。国境観光は本当に感染拡大をもたらすマイナスの要因であるのか。また、両国の感染状況の異同に

【特集】

よって国境を越える観光行動はどのように変化するのか、など、新たな発想が勢いよく湧いてきた。だがその分さらに現地に行きたいという気持ちに駆られてしまう。

結局、詳細な調査を実施せずに、修士論文を文献研究とすることは筆者の本心に背くことであると考え、一年間修士課程を延ばすことに決定した。だがその決定にいたるまでに、これからの生活に起こりうる事柄についていろいろと想像してしまった。たとえば、同級生と比べて劣等感を感じてしまい、周囲の視線を敏感に読み取ってしまうのか。それとも、他人の口から出る好意的な言葉が妖艶なピンク色の霧を化して空気に漂うのか。残念ではあるが、以上は幻想の域を出ないのであった。研究生活は変わりなく続いている。

その後、中国の感染状況の収束や入国条件の緩和によって、中国への帰国と調査について 2020 年の 12 月に目途がたった。すぐさま、12 月 6 日に成田空港から出発した。そして、中国・深圳市宝安空港の税関に一步足を踏み入れてから、14 日間（現行している政策によれば、21 日間）の人生初の集中隔離生活を迎えることとなった。

3. 深圳での集中隔離生活と思慕

日本から中国への渡航では、飛行機の出発時刻前の 48 時間以内に発行された、中国大使館が指定する検定機関による PCR 検査陰性証明書を手していなければならない（2020 年 12 月時点）。そして中国に入国後は防疫部門の検査・訊問を経て、入国者全員がホテルで 14 日間の集中隔離となる（特別なビジネス関係者以外）。しかし、中国の防疫政策は地方責任制であり、行き先の感染状況に応じて 0 日～14 日間の自宅隔離を集中隔離後にさらに要求されることもある。入国政策は時期によって多少変化するが、大体は以上の流れとなった。

14 日間の隔離生活を前にして、その準備の仕方は十人十色だろう。中国への渡航準備についての情報や文章はネット等いたるところに遍在しており、ここではそれらの情報についての一般的な紹介は行わない。その代わりに、隔離中に心の隅から生まれやすい孤独に対する筆者の私的な準備や、筆者なりの過ごし方について重点的に述べたいと思う。

まず、隔離生活中的「楽しみ」を自分で築くことが大事だと考えた。出発の一週間前、筆者のこれまでの人生は隔離と似た経験だったのではないかとふと追憶し、そこから高校時代の愛読書であった村上春樹の『1Q84』を思い出した。この小説の第三部。主人公である青豆雅美はある宗教組織に追われ、何数ヶ月の間高円寺のマンションに隠れ住んでいた。当然、彼女は外に出ることができない。毎日の行動は、室内で運動をすることやプルーストの『失われた時を求めて』を読むことくらいであった（最終的には彼女は主人公の男性と一緒に 1984 年へと戻っていく）。今回筆者が直面する隔離生活は、青豆雅美の境遇を深く感受する絶好の機会であろうか。そう興奮しながら、携帯しやすい小型室内運動器具と『失われた時を求めて』を速やかに用意した。隔離中のホテルはユートピアのようなものとなった。青豆雅美とプルーストのおかげで、ホテルのベッドで体を巻いて天井をじっと見ているだけでも、時の流れの浪漫を感じられた。

隔離生活において大事なことはまだある。隔離中の趣を発見することである。例えば、筆者の滞在していたホテルは深圳市・光明区公明水庫の西側、光橋路というところに位置する。ホテルの窓は東向きであった。窓から外を眺めると、高速道路と水庫の現代的な景色がはっきりと見える。水庫の堤防に乘蓮寺の東京大仏とほぼ同じ大きさの公明水庫の四文字が書いてある。まさかと思ったが、水庫は筆者の指導教員とが同名であったのだ。この水庫を見た途端、東方の日本で先生は私のことを見てくれて

いるのではないかと思ひ至った。入居初日の不安や不慣れは、公明水庫のおかげで消えてしまった。

ところで、隔離生活中の「入浴時間」を例に、日常生活で当たり前のように行っていた習慣について筆者が思考を改めた経験について述べていきたい。習慣的に、筆者がシャワーを浴びる時間帯は、朝の出かける前であった。その理由は、昼は他者とともに社会的活動を行う時間だと考えるからである。朝のシャワーで身体を清潔にし、昼以降に接する他者に良い印象を残すか、あるいは少なくとも悪い印象を与えないようにしてきた。しかし、ホテルでの隔離により、人との接触は突然途絶えることとなった。隔離生活初日の翌朝に目覚めたとき、朝にシャワーを浴びることの社会的意義が失われていることに気が付いたのである。今まで当たり前と思っていた習慣は——窓の外の公明水庫の水と同様に——人・社会への馴化の産物に過ぎない構築物であると思った。

シャワーを浴びる時間をめぐるこのふとした思考をきっかけに、筆者は以前の生活の諸習慣を内省することとなった。結局、社会的に意義があると信じてこれまで身につけてきた効率的な習慣の数々は、隔離の環境においてはほとんど意味を持たない。例えば、素早くメールを返事すること、朝の満員電車に赴くこと、つねに時間を気にして急ぐ必要があること、など。

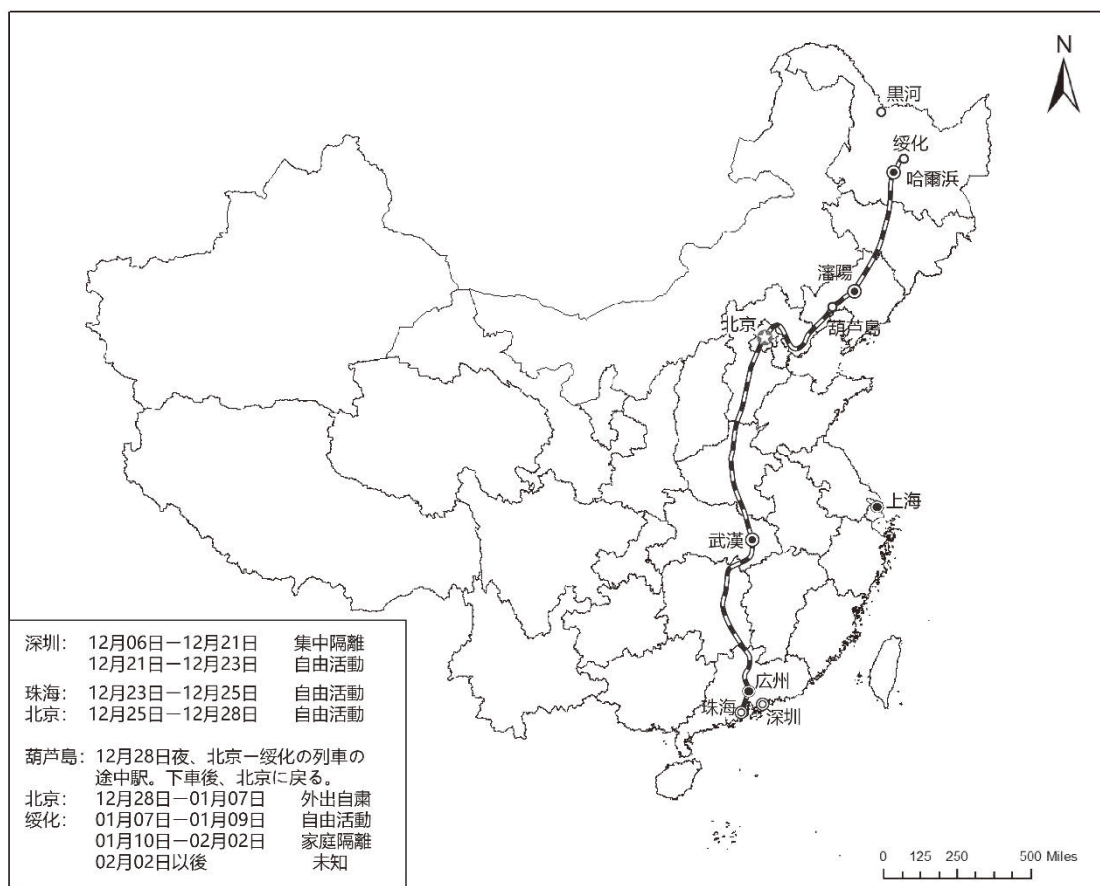
4. 調査計画の再中止と周遊的な隔離のはじまり

2020 年 12 月下旬、深圳での集中隔離が無事に終わったころ、筆者の研究対象地・黒河市では COVID-19 の感染者が新たに発見され、「疫情中等危険地域」となった。黒河市政府は 12 月 30 日、感染拡大を収束するために市内の交通機関の運行を一切停止し、黒河市への人の移動の一切を禁じる発令を行った。市民は全員自家に待機し、その間に数回の PCR 検査を実施して再開放を検討することを政府は決定した。そのため、筆者は集中隔離後すぐに黒河市を訪ねることを断念せざるを得なかった。まずは黒竜江省・綏化市（実家）に帰り、状況をみながら調査計画を再開することとなった。図 1 は、帰省までのルートや各地での隔離・外出自粛・自由活動の期間を詳細に記したものである。こうして 1 ヶ月以上を要した帰省は筆者にとっては生まれて以降初の体験であり、これまでの筆者の世界観は強く揺るがされた。

【特集】

図 1 に示すように、深圳と珠海間以外、移動手段は全て鉄道を利用していった。中国大陸の南北を越える 4,000km 以上の旅であった。そのはじまりは、12 月 21 日に集中隔離ホテルを出てから迎えた、初めての自由活動であった。当時は、各地の政策や感染状況の差異によって地域ごとに異なる集中隔離措置が採られていること、そして筆者の隔離も実はまだ続いていたことを知らなかった（これについては後述する）。筆者は天真爛漫に、社会主義性格の港湾都市である深圳の海湾部にて、その亜熱帯気候のなかで陶醉していた。海岸から都市側を眺めると、現代的な CBD はココナツの木の上に建っているかのようにキラキラと輝いている。海に面した深圳湾公園の白い長椅でビールを飲み、澳門と港珠澳大橋を近距離で体感しながら、筆者は自由の良さを味わっていた。

図 1 周遊的な隔離ルート（筆者作成）



その後も自由な時間は続き、客船で珠海へと向かい弟と会うことができた。さらにその後、高速鉄道で北京に赴き、学部時代の親友たちと楽しい週末を過ごした。12 月 28 日には寝台列車で北京から綏化市（実家）に帰る予定であったが、しかし列車が東北地域に進行しかかったところ、綏化市の防疫部門から筆者に連絡があった。現地の現行政策によれば、海外からの帰国者は 14 日の集中隔離を経てから、さらに自宅での 14 日間の隔離が必要だというのである。加えて、実家で自己隔離を行った場合、筆者と接触することとなる両親の出勤も禁止されてしまう。実家ででの隔離は、すなわち家

【特集】

の門が閉じられることを意味していた。これを避けたい場合、集中隔離以降、14 日間は国内の無感染地区に滞在し、かつ帰国前 48 時間以内の PCR 検査陰性証明書を保持している必要がある。そうすれば、14 日間の家内隔離が不要となる。そこで筆者は直ちに実家への帰省を中止し、ひとまず鉄道の次の停車駅で下車した。その駅は遼寧省・葫蘆島市であった。

葫蘆島市は室外気温マイナス 20 度超えの北国である。まさに『雪国』がごとく「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。夜の底が白くなった」のである。ちょうど、降りたばかりの鉄道、そのレストラン車両の暖かいひかりが目に映った。寒い風がふきあれるなか、それは非常に美しかった。12 月 28 日夜 17 時、集中隔離を終えて 7 日後であるが、無感染地区での滞在義務がまだ 7 日間残っていた。葫蘆島市で懐かしい東北のご飯を食べてから、筆者は友人の世話を頼って当夜は北京の友人の家に向かい、そこから 8 日間の外出自粛生活を送った。

2021 年 1 月 7 日、再び北京から绥化行の寝台列車に乗り、19 時間を経た翌日の朝 4 時、绥化に到着した。2020 年 12 月 6 日に成田出発から出国してから、ちょうど 1 ヶ月であった。実家でこの 1 ヶ月の経歴を整理していたとき、テレビ局では绥化市の轄域内に新感染者が発見されたことが報道された（1 月 9 日のニュース）。翌日の 1 月 10 日、绥化市全域の大型商業施設は営業中止となり、市民全員の外出自粛措置が始まったのである。1 月 19 日から現在、市民全員の外出は完全に禁止され、市の防疫部門は 3 日間に一度住民の家を訪ね、PCR 検査を実施してまわった。結局のところ、深圳で集中隔離されていたところと同じ状況になってしまった。

こうして各地の防疫政策を経験したことによって、筆者は隔離生活と付き合うプロになったと思われる。筆者の帰国調査の経験はもちろん特殊なものであるとは思いますが、もし 2021 年に中国への現地調査を行う計画がある院生の読者がいたならば、その参考になれば嬉しいと思う。

5. むすびに：コロナ時代に見いだす観光の本質

2 ヶ月の隔離生活を介して、隔離と観光の類似点が見いだされた。どちらも日常生活から離れるという特性をもち、その経験を介して日常生活の再認識にいたる経路を有している。こういってよければ、今日世界的に行われている隔離措置は、COVID-19 時代における新たなリゾート観光の一側面を描出しているといえるかもしれない。

また、「外出自粛」や「隔離」という言葉はもはや私たちの日常生活に侵入している。いつのまにか、移動は「悪」としてみなされるようになった。苦境にあえぐ地域の旅行会社や観光産業では、こうした変化に対応するために、移動を伴わない VR 観光を押し出したことは記憶に新しい。こうした動きの背後には、「現地に行けない、現地的美食を賞味できない、だがそれでも観光したい」という観光への憧れがあらわれているのではないだろうか。感染症の時代に可視化されたこの「憧れ」を検討に付すことによって、観光とは何か、人はなぜ観光したいのか、という問題を新たな角度から再検討できるかもしれない。